第三回旧山陽道歩く会　5月20日
歩こう、連ごう、旧山陽道

JR清音駅から井原線矢掛駅までの約１４km

このガイドブックの著者は真備町川辺の加藤満宏氏にお願いし、

地図は岡山県歴史の道調査報告書「山陽道」岡山県教育委員会

（平成４年３月発行）の１部を了解利用させて頂きました。

５月２０日（日）伯備線　岡山駅８：５９～清音駅９：２４（出来るだけこれで）

９：３０～９：５０　JR清音駅　高梁川河川敷集合（ＪＲ清音徒歩３分）

９：５０～１０：１０　出発式　主催者挨拶　来賓挨拶　日程説明

１０：１０　出発Ａ隊（ウォーク中心）・Ｂ隊（歴史旧跡中心）（旧山陽道の周辺に存在する名所・史跡のガイドブックを差上げます　解説　加藤満宏氏）

１１：００　**まきび公園**到着　加藤氏からガイド後**昼食（各自持参下さい）**
竹の子ご飯３００食無料　バザー有（弁当等も販売してます）
まきび公園フォークライブ　（音楽館有志）

１１：５０　まきび公園出発　襷引継式

１３：００～１３：１５　吉備公館跡（トイレ休憩）　加藤氏よりガイド有

１５：００　矢掛本陣着　ゆずジュース無料　襷引継式　矢掛本陣団体割引見学

１５：１５　矢掛本陣解散予定　井原線発車まで矢掛町歩き案内（妹尾さん）

井原線矢掛駅（岡山駅まで運賃８８０円）岡山方面（伯備線　倉敷経由）

	１４：３４	１５：３４	１６：２８	１７：００	１７：３０	１８：０１
矢掛駅（神辺方面）	１４：１７	１４：４８	１５：４６	１７：００	１７：４４	

注意事項　雨天決行

＊参加者でレクリエーション傷害保険への加入希望者は１００円が必要です。
小学生の方は出来るだけ保護者の方と参加下さい。
参加中、体調がすぐれなくなった方は、至急スタッフにお知らせ下さい。

予告　第４回旧山陽道歩く会
１９年１０月２８日予定　ももたろうウォーク（全国生涯フェスティバル参加事業）
吉備線服部駅～鬼ノ城～足守～足守駅を予定

主催：旧山陽道歩く会　岡山駅西地域街づくり協議会　ＪＲ西日本岡山支社
連塾　地域創生学研究所　吉備学会

後援：岡山県教育委員会　中国学園大学・中国短期大学　山陽新聞社　倉敷市
倉敷市教育委員会　矢掛町　矢掛町教育委員会　箭田まちづくり推進協議会
川辺地区まちづくり推進協議会

旧山陽道歩く会事務局　岡山市奉還町２－１６－１６　ベストサービス内
携帯０９０－７５９０－１５２９　衣笠宏

旧山陽道　　川辺宿から矢掛宿へ

川辺の渡し

この立派な堤防は、明治２６年未曽有の大洪水の後、明治３５年から大正 14 年にかけての高梁川大改修により完成したものであります。そして、この堤防に、当時としては県下最長の木橋が大正８年に架けられました。現在の橋は、交通量の増大に伴い昭和５３年に完成しました。その下流に位置する橋は、昭和８年完成の鉄筋コンクリート製であります。大正８年以前には、橋はなく、明治の初め頃は川に杭をうち、その上に板を乗せる板橋であり、しかも本流は舟による渡しでありました。洪水時には流出防止のために、板を撤去しました。大正８年木橋が完成したときの地域住民の喜びは如何ほどであったことでしょうか。

さて、江戸時代の頃の「川辺の渡し」は、下流の橋の下手にあり、旧山陽道の下道郡川辺村と窪屋郡中島村を結ぶ重要な渡しでありました。川辺の渡しがどのようなものであったか、記録がないので定かではありませんが、この高梁川を数多の軍勢・参勤交代の諸大名・商人・旅人たちが渡ったことでしょう。

川辺橋の東に位置する円錐形の山が、海抜３０２ｍの福山であります。福山という地名は一説には、「真金吹く」製鉄に関する地名といわれています。福山の西麓には、古墳時代終末期の夥しい群集墳が点在しています。山頂には、平安時代に栄えた山岳仏教の寺院跡があり、北麓には中世からの幸山（こうざん）城址もあります。

福山を全国的に有名にしたのは、「太平記」の中の福山合戦であります。籠城する南朝方新田義貞の大井田氏経軍と九州で態勢を整え上洛を目指す足利尊氏の弟直義軍の戦いであります。太平記によると３０万の軍勢が高梁川を渡ったことになり、それは壮観であったことでしょう。また、織田信長の中国攻めの高松城に羽柴秀吉軍と毛利軍が対峙した際、毛利の軍勢が高梁川を渡り、また退却しました。当時の川の状態は、堤防がないため川筋が幾重にも分れ、洪水の度に川筋を変えていたので、現在のようにそれほど深くはなかったと思われます。

享保１４年（１７２９）、将軍徳川吉宗の時、献上品のベトナムの象が長崎を出航して下関に上陸し、陸路江戸に向かったようです。岡田藩の古文書「実相公実録」によると、象の行列が４月１２日川辺宿に泊り、殿様は源福寺の藪の中より見たと記録しています。このことは、象に万一のことがあると切腹ものであったので、行列が領内を無事に通過することを祈ってのことでしょう（ふるさと歴史館資料より）。翌日一行は川辺の渡しを無事渡ったこととおもわれます。

参勤交代の大行列はどのように渡ったのでしょうか。毛利藩や薩摩藩となると５００人を超えますので、舟で渡るのは不可能であります。一度に渡る方法としては、筏を組んで板を並べるか、川の流れに沿って舟をつなぎ、その上に丈夫な板を並べれば、渡る方法があります。東京都の船橋・岡山市の高松城の舟橋などが地名として残っています。

神楽土手

川辺には、県下でも珍しい輪中に相当するものがあります。当地では神楽土手といっています。輪中のルーツは、木曽川・長良川・揖斐川が集中する大垣市付近です。洪水から土地や家屋を守るために、その周囲に堤防を築いたのが輪中であります。川辺の輪中は、土手の基部約１１ｍ、高さ約４ｍ、周囲２．８ｋｍと推定されます。土手の四隅には、艮に疫神社、巽に荒神社、未申に金比羅宮、乾に阿部宮を配し、守護神としました。

なぜ川辺に輪中があるのでしょうか。　江戸時代、川辺を治めていたのは、岡田藩伊東氏であります。伊東氏は、伊豆半島の出身で、織田信長に仕え、戦功に

より織田信長の「長」の一字をもらいうけ、代々襲名しています。岡田藩は、一万石の小大名ですが、１万石の内、美濃国揖斐川の流域に２０００石の飛び地があり、代官を置いて治めさせました。揖斐川流域には、徳川家康に仕えた旗本の土地がひしめいている地域です。岡田藩主の伊東氏は一時川辺の土居屋敷にいましたが、たびたびの洪水のためか、岡田の中村に移転しています。神楽土手が、いつ頃作られたか定かではありませんが、伊東氏の故地である美濃の輪中を参考にしたことは容易に想像がつきます。宝永年間（１７０４代）の小田川の改修絵図には既に記載されていますので、それ以前であることは確かです。享保年間（１７１６代）、小田川の大改修に着手した守屋勘兵衛も美濃の国を訪れています。

明治２６年、川辺の秋祭りの夜、未曾有の大洪水のため、神楽土手が決壊し、本陣をはじめ川辺の町の多くの家屋は流失しました。流失を免れたのは、瓦葺の家１９軒のみといわれています。当時の建物は、藁葺きが主流のため、瀬戸内海まで流され助かった人もいましたが、流失した家屋は２６５棟、死者１８０名という大惨事となりました。水位がどれくらいだったのでしょうか。源福寺本堂西の石垣上にある御蔵屋の庇の壁に、また、現在の川辺小学校にあった蔵鏡寺本堂（真備町有井の宝生院に移築）の柱に泥のしみが残っています。計算すると１５m以上だったと思われます。

高梁川の大改修に伴い、神楽土手は撤去されましたが、源福寺・川辺分館南の土手・荒神社東の道、門田の道路等にその遺構が残っています。

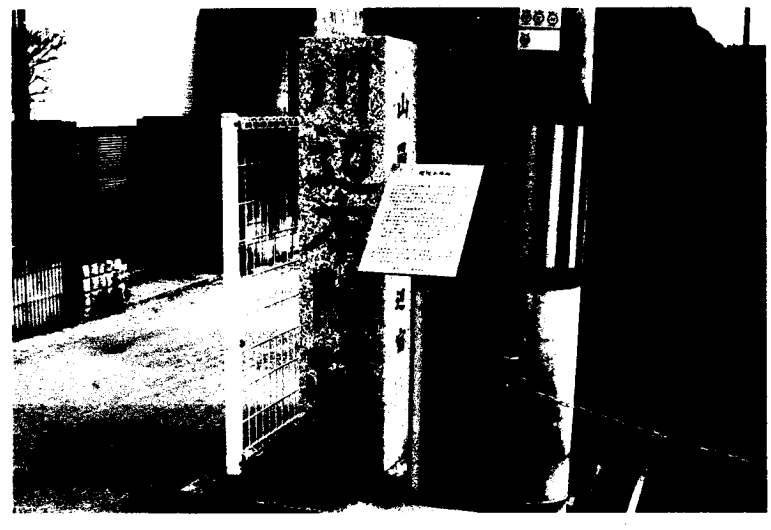
川辺の一里塚

高梁川右岸堤防、川辺橋から旧県道を下り、矢掛方面に曲がったところに一里塚があります。もと川辺の渡しの右岸の川岸にありましたが、高梁川の大改修で現地に移されました。一里塚には、南側に松、北側に榎が植えられていましたが、大改修で伐採され、塚も撤去されて今はありません。一里塚付近一帯には、洪水による被害を防ぐために竹を植えていましたが、今は昔の姿はありません。

一里塚は、もともと道の左右にあり、９m四方の塚が形成され、松や榎を植え、休息したり、駄賃などの目安としました。

川辺の一里塚には、江戸日本橋より１８０里（約７０７ｋｍ）と標示されています。各地の一里塚の多くは破壊されましたが、真金の一里塚・香登の一里塚が当時の面影をとどめています。上りの一里塚は、総社市山手三軒屋、下りは、真備町箭田山ノ端にあり、その次は真備町と矢形町の境界付近の川原谷にその標識があります。

川辺本陣



川辺の本陣は、現在の植村歯科医院の付近にありましたが、明治２６年の大洪水で流失しました。大庄屋の難波家は代々醤油を製造し、財をなしていました。本陣は長崎奉行などの江戸幕府の役人・公卿・大名・高僧などの宿泊に当てられていました。川辺の本陣にどのような人が宿泊したかは、明治２６年の洪水で資料が流失したため、何も残っていません。しかし、隣の本陣である矢掛の石井家には、豊富な資料がありますので、ある程度推定することはできます。

山陽道による本格的な参勤交代は、江戸中期頃からといわれ、それ以前は、主として船で瀬戸内海を利用していました。特に九州の大名は船が多かったといわれています。世の中が安定するにつれ、参勤交代は一大デモンストレーションとしての行列に変化し、諸大名は力を誇示するようになりました。川辺宿の宿泊休憩率は矢掛宿と同じく４５％以上で、山陽道の中では高い部類に属していました。

本陣の間取りは、矢掛の本陣とほぼ同じであったといわれています。

なお、脇本陣は、明治時代村役場として利用され、その後廃家となり、昭和６３年頃解体され、今は消防器庫になっています。

古代山陽道駅家

古代の山陽道は、大和から九州の大宰府を結ぶ唯一の大路であり、軍用道路でもありました。平安時代の和名抄などの記録によると川辺（かわのへ）には駅家があり、馬２０匹が置かれていました。駅家がどのあたりにあったのか今だ発見されていませんが、たび重なる高梁川の氾濫で地下に埋もれていることとおもわれます。古代山陽道の駅家がほぼ完全に発掘されたのは、龍野市の布勢駅家が有名です。面積は方約１町で建物は白壁・赤瓦葺といわれています。川辺の上りの駅家は津峴（つさき）で、倉敷市矢部の矢部廃寺が比定されています。下りの小田駅家は、矢掛の毎戸遺跡が発掘により明らかになりました。最近における駅家の発掘では、従来夥しい古代瓦が出土し、廃寺ではないかといわれたところが実は、駅家の跡だったというのが証明されています。古代の道は、条里制に基づいて、ほぼ直線に最短距離を通っていましたので、川辺における山陽道は川辺と辻田・岡田の境界線が考えられます。境界線付近には、板屋・門田・薬師・ダーサイ（太宰？）などの地名が残っていますので、川辺の駅家もこのあたりが推定されます。

源福寺

川辺地区で唯一現存する寺で、旧山陽道川辺宿の西にあります。川辺は宿場町なので最低の７ヶ寺がありましたが、洪水で失われたりして現在は廃寺となっています。

源福寺は、室町時代の創建、曹洞宗で、岡田藩伊東氏の菩提寺です。代々藩主の位牌が安置され、伊東長之・伊東長裕(９代)の墓所でもあります。墓所の石垣は、「一日一石」といわれ、アリの隙間もない見事なもので一見の価値があります。

吉備寺と箭田廃寺

真備町箭田にあり、奈良時代の創建、本尊は薬師如来（行基の作と伝えられる）で、吉備真備の菩提寺でもあります。

もと真教寺と称していましたが、岡田藩主伊東氏が吉備寺南麓の塚を発掘したところ長い足の骨が出土し、吉備真備に相違ないということで以降、吉備寺と称するようになりました。

現在の山門は、享保年間に再建されたものであります。吉備寺周辺一帯は、箭田廃寺跡で古代寺院のあったところであります。出土品の鬼瓦や四葉蓮華文の瓦が有名で、鬼瓦は国の重要文化財に指定されています。瓦等は朝鮮半島の影響が強く、総社市の秦原廃寺とともに白鳳期の寺院として、早くから仏教が伝来した地域といわれています。境内には、創建時の造りだしのある礎石が点在します。塔の心礎は庫裏西にありますが、元の位置から移動しています。真備町という狭い地域に岡田廃寺・八高廃寺とともに三つの塔の心礎がある地域は他にはありません。山陽道を通行する人々は立派な塔に驚いたに違いありません。

箭田大塚古墳

真備町箭田にあり、築造は、６世紀後半、前方後円墳、横穴式石室、箱型石棺２基をもつ。県内三大横穴式石室の一つで、岡山市牟佐の牟佐大塚古墳・総社市のこうもり塚古墳とともに有名であります。奈良県明日香村にある石舞台古墳に匹敵する大きさです。出土品には、勾玉・首飾り・馬具・須恵器・耳輪などがあり、吉備寺に一部保管されています。この一帯は、下道郡に属し、小田川流域を治める一大勢力が存在したことをうかがわせるものであります。町内の古墳には、４世紀の黒宮大塚古墳・５世紀後半の天狗山古墳・６世紀中葉の二万大塚古墳と続きます。今、注目されいますのは、下二万の勝負砂（ざこ）古墳です。岡山大学文学部が１０年計画で真備町内の古墳を発掘していますが、この古墳は５世紀後半の築造で未盗掘であることが判明しました。鏡・鉄甲・馬具・鉄鏃等が出土していて、今後いろいろの副葬品の発掘が期待されます。

真備町の地名の由来

地名は、奈良時代に右大臣までに登りつめた吉備真備に由来するものです。

吉備真備は、持統天皇９年（６９５）に生まれ、阿倍仲麻呂・玄坊・井真成（唐で客死）らとともに遣唐留学生として１８年間勉学に励み、天平６年（７３４）に帰国しました。

天平勝宝４年には、遣唐使藤原清河とともに副使として、再度唐に渡りました。この船は、阿倍仲麻呂を伴って帰国の予定でしたが、大使の船は遭難し、藤原清河・阿倍仲麻呂は二度と日本の地を踏むことはありませんでした。吉備真備の船は、遭難しながらも鑑真和上を伴って帰国することができました。また、佐賀県に怡土城を築き、藤原仲麻呂の乱を平定し、右大臣となりました。晩年は、郷里の真備に帰り、小田川の渓流の琴弾岩で琴を弾いて余生を過ごしたと伝えられます。

唐で名を成したのは、阿倍仲麻呂と吉備真備といわれ、当時は、中央の主要な豪族の子弟が多い中で、地方出身子弟が採用されることは少なく、よほど優れた才能の持ち主だったことが伺われます。

真備町の買地券文（倉敷考古館蔵）

日本で発見された珍しい最古の買地券です。買地券とは、土地の神様より墓地を買う証文で、瓦や専に表示します。

真備町尾崎瀬戸で、文政３年（１８３０）医師佐藤佐仲氏の老松の下より出土しました。瓦に４行５６字の買地券には、「備中国下道郡八田郷戸主八田部益足戸白髪部兆宮作之墓地　以　天平宝字七年癸卯(７６３)十月十六日八田部長矢田部益足之買地券文」と記載されていました。地名では、八田郷・人名では、矢田部益足など注目されます。八田という地名は仁徳天皇の妃、八田皇女の御名代で、白髪部は、清寧天皇の関係が伺われます。

買地券は、１９７３年韓国、武寧王（５７３年没）陵で発見されたことで有名ですが、日本には仏教とともに伝来したのだと思います。総社市新本、もと宅源寺にもこれに似た買地券があります。

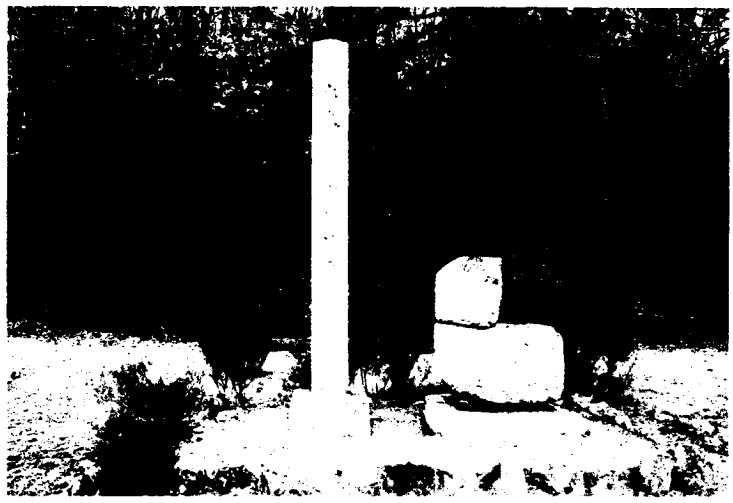
猿掛城

真備町と矢掛町の境界の南の尾根海抜２００ｍに本丸・二の丸・三の丸の跡のある猿掛城があります。北に妹山、南に猿掛の間を流れる小田川は、狭いため急流となります。また、旧山陽道も通っているので、水陸交通の要衝で、ここを押さえることは、戦略上大変重要であります。

ここに最初に城を築いたのは、庄氏といわれます。庄氏は、関東武者で源平合戦の時、源義経の一の谷合戦に功績があり、守護として備中の山手から矢掛にかけての庄を与えられました。

備中の兵乱では、毛利元就の四男・毛利元清が城主となりました。

下道氏の墓地



東三成の集落で、小田川の北の小高いところにあり、今は公園となっています。

元禄12年（1699）、地区の道路の拡張工事中に骨蔵器が発見されました。骨蔵器は銅製で、中に和銅銭6枚と人骨があり、蓋に次のような銘がありました。

「銘下道圀勝弟圀依朝臣右二人母夫人之骨蔵器故知後人明不可移破」「以和銅元年（７０８）歳次戊申十一月２７己酉成」

このことから、吉備真備の祖母の骨蔵器であることが判明しました。また、火葬の風習が行われていたこともわかりました。日本での火葬の風習は、700年元興寺の道昭（遣唐留学僧）の遺言によりはじまりました。703年（大宝3年）持統天皇が飛鳥岡に火葬となりましたので、いち早くこの地に仏教が伝わっていたと思われます。公園にある石櫃は東三成字唐臼から運んだもので、骨蔵器の外容器とはいえません。石櫃は凝灰岩製で姫路市の竜山石といわれています。

なお、圀勝寺は、吉備真備の父を祀ります。元禄時代、骨蔵器の発見により改称しました。椿が有名です。

二万の地名の由来

備中の介として赴任した三好清行が意見封事１２か条を延喜１４年（９１４）宇多天皇に報告したときのくだり。「宇多天皇の寛平5年（８９３）、自分は備中介となって、かの国に下った。ここには下道郡に邇摩郷というところがある。皇極天皇が中大兄皇子らを従えて、半島征伐に筑紫に行幸する途中、出征兵士を募ったら、たちどころに２万の兵を得たので、二万郷というところがある。後に邇摩郷と改めた。これは、かの国の風土記に書かれているところである。ところが、天平神護（７６６）のころ、右大臣吉備真備が、郷里の下道郡の郡司もかねてこの郷の員を調査したところ、成年男子千九百余人しかいなかった。貞観の初年、有名な民部卿藤原保則が同じ国の介として、その壮丁を調べたら、わずか七十余人であった。自分が介として寛平5年現在で調査したところでは老丁二人、正丁四人、中男三人、税役負担者は九人だけであった。延喜１１年（９１１）備中介藤原公利が任期満了して帰国の際、「一人も居ない」ということだった。

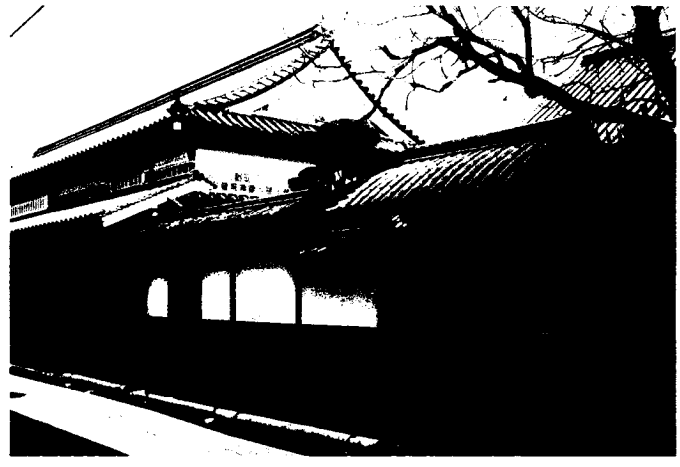
迩麿の郷　　「備中国風土記逸文」

皇極天皇６年。大唐の将軍蘇定方、新羅の軍を率て百済を伐ちき。百済、使いを遣はし救いを乞ひき。天皇、筑紫に行幸し、救いの兵を出さむとしたまふ。時に天智天皇、皇太子として政を授ひて従ひ行したまふ。下道の郡に路宿りたまひしとき、一郷戸邑の甚盛なるを見たまひ、天皇詔を下したまひて試にこの郷の軍士を徴りたまひき。即ち勝兵の二万ばかりの人を得つ、天皇大く悦びたまひ、この邑を名づけて二万の郷と曰びたまふ。後改めて迩麿と曰ふ。その後、天皇、筑紫の行宮に崩りましぬ。終にこの軍を遣はすことなし。

二万には、銅・鉄・水銀・タングステンなどの鉱山が沢山あり、昭和２０年代まで採掘されていましたので、当時も、鉱山関係の人々が大勢住んでいて、栄えていたことは事実だと思われます。島根県の石見銀山地方にも迩麿郷がありますので、鉱山に関する地名と思われます。西暦６００年、百済国が唐と白髪の連合軍に敗れました。同盟関係にあった百済救援のため、兵を募ったのは事実と思われますが、この時の大和朝廷は全体で２７０００人の兵を派遣しています。

矢掛本陣

矢掛本陣は、石井家で代々造り酒屋で大庄屋を勤めていました。建物は国の重要文化財に指定されています。石井家の古文書は宿泊大名なでの到着から出発・接待・みやげ・料理・助郷・料金等に到るまで、きめこまかに記録されており、本陣研究の第一級の資料で全国的に有名です。脇本陣は元両替商で建物は国の重要文化財に指定されていて、宿場町に本陣、脇本陣とも重要文化財というところは珍しいことです。



本陣屋敷は間口２０間（３６m）、奥行５０間（９０m）で、南は小田川に接していたました。高瀬舟が着岸し、荷物は長屋門から運ばれました。この長屋は、森家の西江原陣屋から宝永３年（１７０６）に移築したものであります。

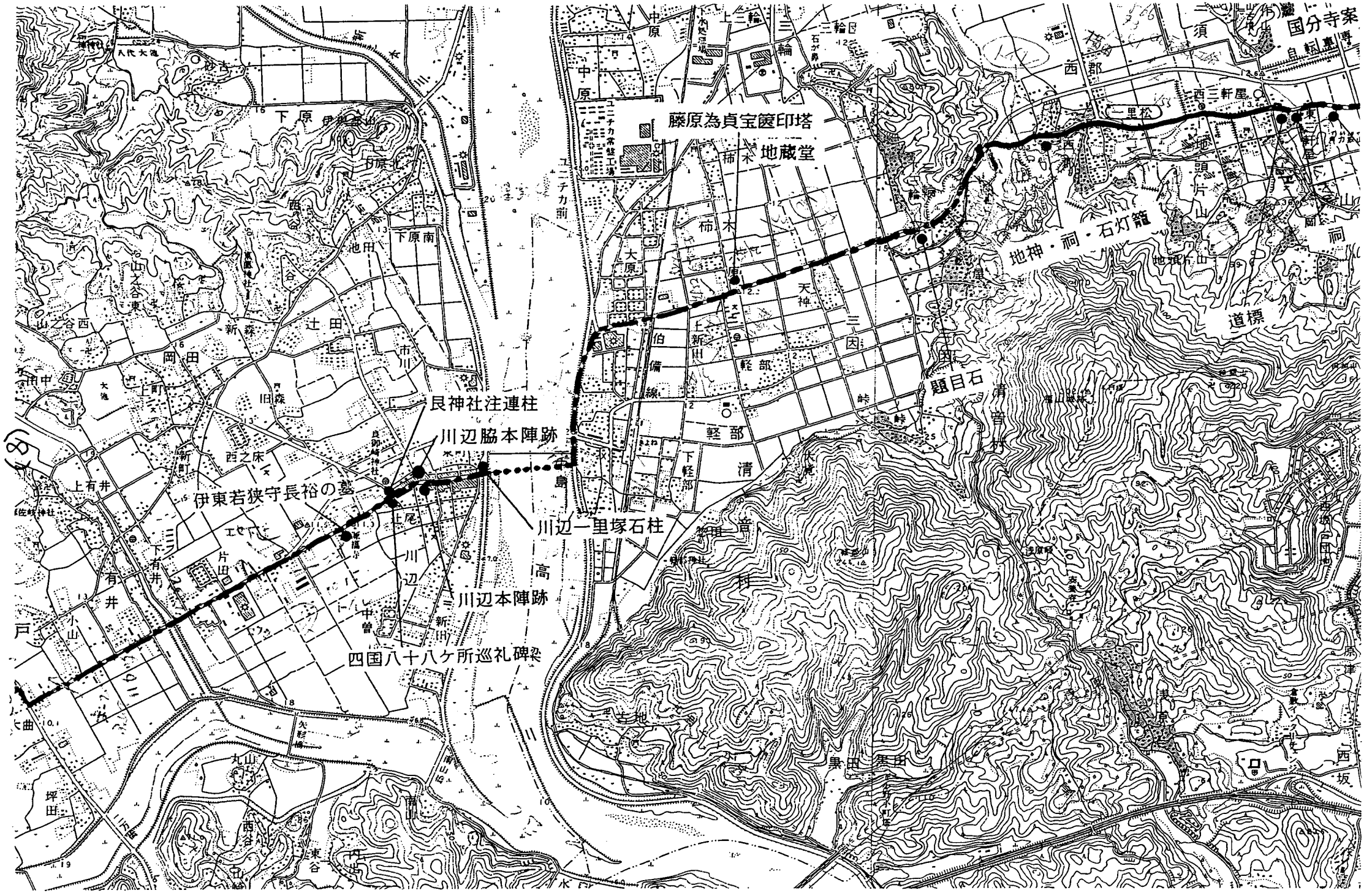
大名・公卿・奉行は御成門から玄関に入り、一段高い上段の間で休憩、宿泊しました。上段の間は、書院造で、欄間の彫刻「ブドウとリス」「マクワウリとチョウ」が特に見事です。廊下の松の構梁は立派。嵐山を借景とした中庭、湯殿、雪隠なども面白い。裏の酒造関係の建物には、酒造りに必要のものが全部揃っていますので、当時の製法がよく分ります。

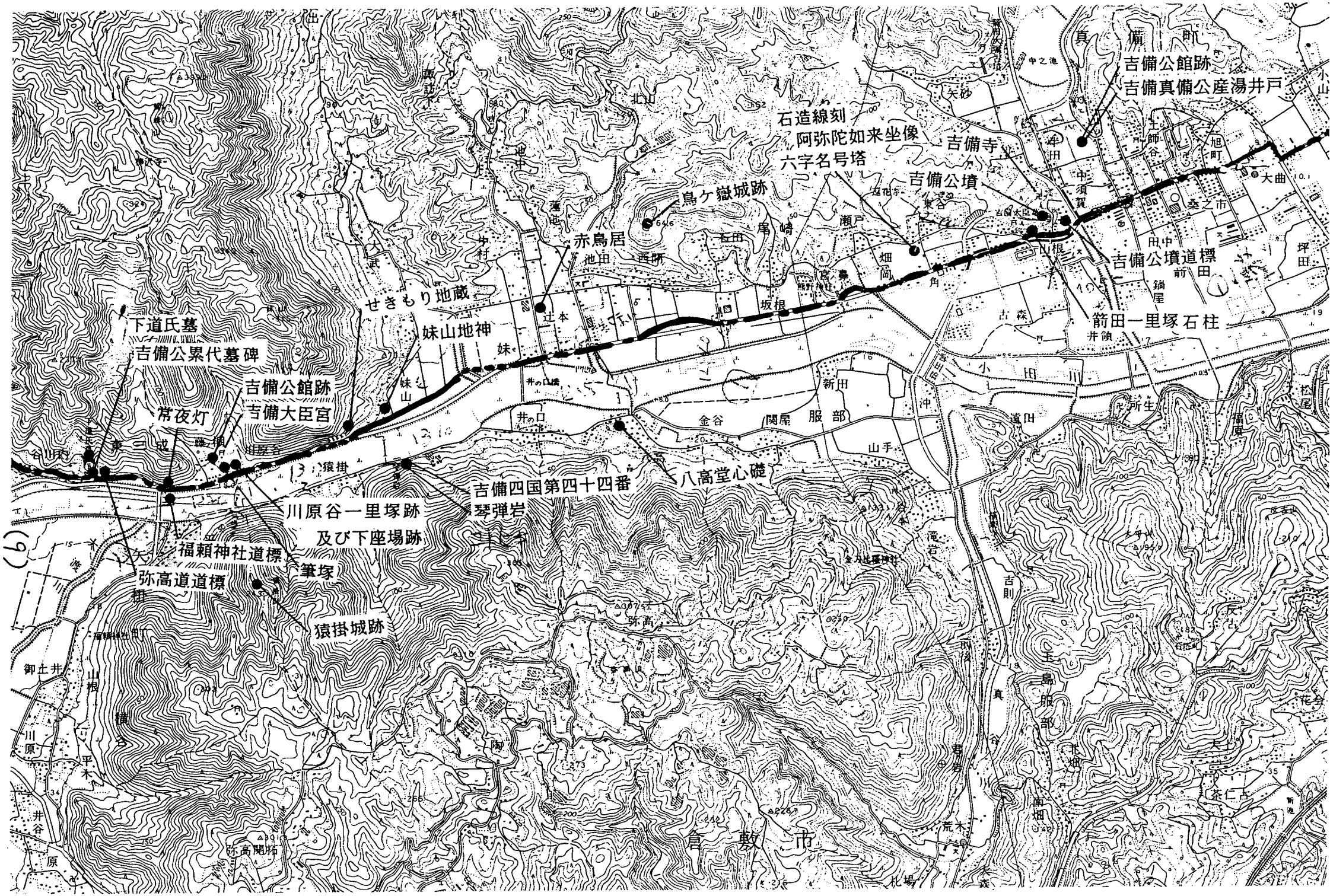
どのような大名が宿泊したか。西日本では、萩・石見・安芸。九州では、唐津・肥前・筑前・筑後・薩摩などの大名が多かったようです。参勤交代の始まった頃、特に、九州の大名は船によるものが多かったようですが、元禄のころから陸路が主流となりました。

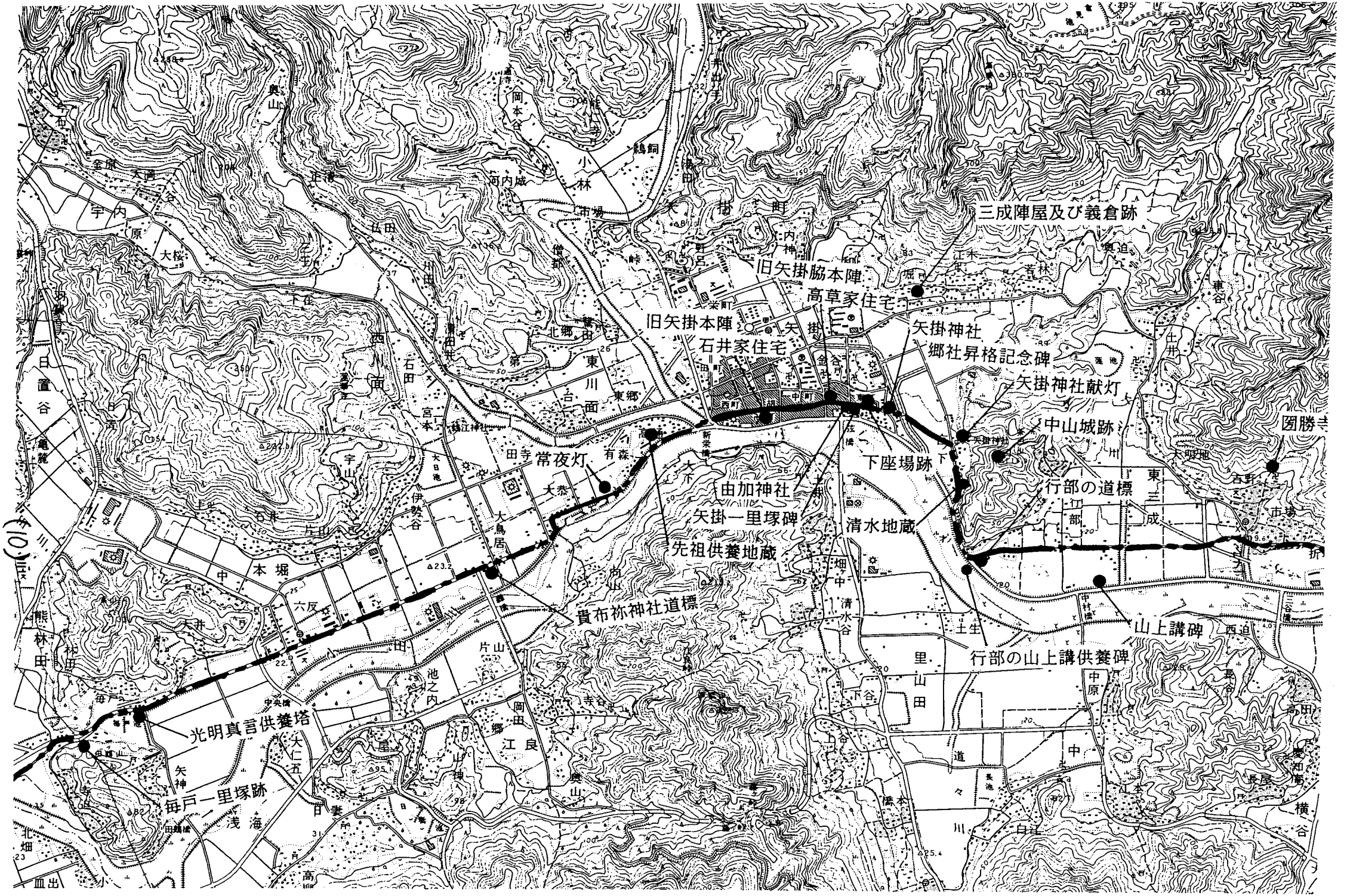
矢掛の宿泊・休憩率は４５パーセントを越え、他の山陽道の本陣より群を抜いていました。ここから上りの宿は、川辺で、下りは井原市の七日市です。

昭和６１年から５年間で、長屋以外の建物の解体修理を行ない現在にいたっています。

筆者　　加藤　満宏（倉敷市真備町川辺）


藤原為貞宝篋印塔
地蔵堂
地神・祠・石灯籠
題目石
道標
国分寺案
一里松
西三軒屋
東三軒屋
長神社注連柱
川辺脇本陣跡
伊東若狭守長裕の墓
川辺一里塚石柱
川辺本陣跡
四国八十八ケ所巡礼碑
下原
中原
三輪
柿木
大原
天神
三因
伯備線
軽部
清
下軽部
岡田
辻田
新森
市川
上有井
有井
川辺
高
川
巣田
西坂
(8)


吉備公館跡
吉備真備公産湯井戸
石造線刻
阿弥陀如来坐像
六字名号塔
吉備寺
吉備公墳
鳥ケ嶽城跡
赤鳥居
吉備公墳道標
箭田一里塚石柱
せきもり地蔵
妹山地神
下道氏墓
吉備公累代墓碑
吉備公館跡
吉備大臣宮
常夜灯
八高堂心礎
吉備四国第四十四番
琴弾岩
川原谷一里塚跡
及び下座場跡
福頼神社道標
筆塚
弥高道道標
猿掛城跡
倉敷市


三成陣屋及び義倉跡
旧矢掛脇本陣
高草家住宅
旧矢掛本陣
石井家住宅
矢掛神社
郷社昇格記念碑
矢掛神社献灯
中山城跡
下座場跡
常夜灯
由加神社
矢掛一里塚碑
先祖供養地蔵
清水地蔵
行部の道標
貴布祢神社道標
山上講碑
行部の山上講供養碑
光明真言供養塔
毎戸一里塚跡
河内城
宇内原
大桜
大掛町
小林
鳥飼
岡本谷
僧都
北郷
東郷
西川面
東川面
石田
宮本
田寺
有森
大奈
大鳥居
伊勢谷
本堀
六反
大井
林田
池之内
岡田郷
江良
片山
寺谷
奥山
甲斐
浅海
矢神
大仁五
八尾
中村
畑中
清水谷
土生
里山田
下谷
中原
道々
橋本
白江
長池
長尾
横谷
高田
愛知南
西迫
東三成
吾野
市場
大明地
矢掛神社
蓮池
仕井
東谷
堀内
芳林
奥迫
白置谷
亀麓
上谷
石井
片田
宇山
大日池
八幡宮
新栄橋
左橋
下橋
中央橋
田端橋
中村橋
(10)